

五九

王水丸

四

多磨才太翁卷之四

同綠

卷之四

續

上載矣入重其強盜事
引銀而紳罰耶詎本
火車之說并猶取死焉

夷國子太行卷之四

上杉藏人達女強盜変

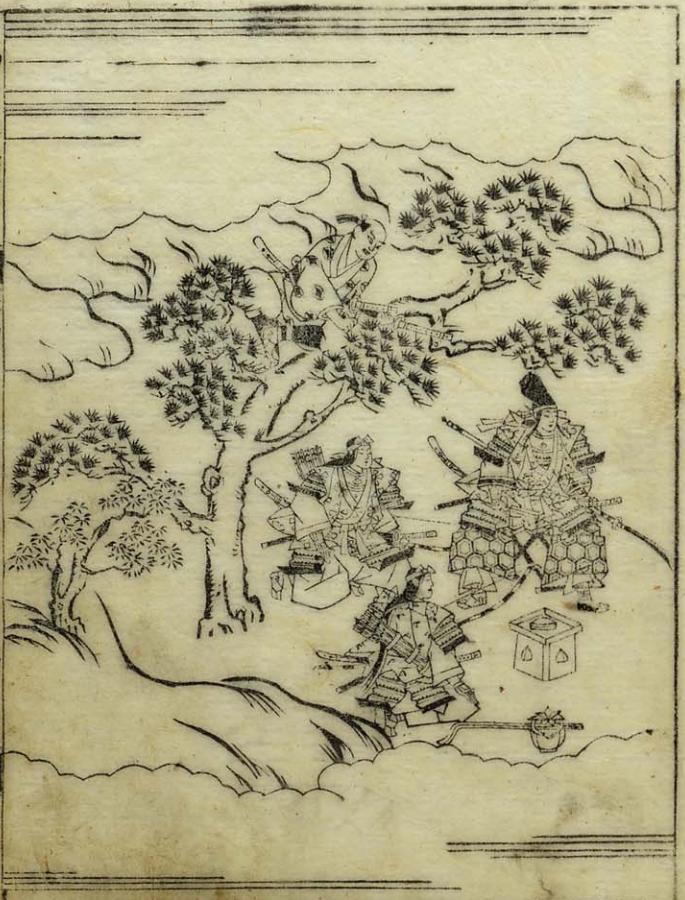
白一裏傳承中以上杉靈廟爲終。上杉藏人國忠と云ふ
わ。憲忠討死の後、後、倉と辞して、播磨赤松はよみ
ゆきとす。うちまへ一先頬まこととて、むらうふ藤を
用ひて、供奉もくせん只一人。後、行里と立ぬる。
足より肉をかじて、あらえを智謀す。それで、アリ矢が
物を達し、あまうれしあらわしと人をもむかす。
世の古の扇や、わらじ城の城の道をあすとて、又は樹
木もあやもしくねども、これを事もせず、唯又堅
きものほどいと恐しく山宿より、こゝ日ハ既り
事か。足下取つ物を簾をあらうに。どう行儀よ
吉原才太郎

卷之四

二

あらめたりたびに仰さりや、我にひきて、仁生をすばらし。
跡よ津よきて、立ち入るやうすが、大のねくとなゆくを
持てはきなり。居人すこし見てすくせるに、さんざわも
申し難く、通さむのく道と、多く猿のむすり迷ふと
をむかして、通さむと、羽をかかへり多く落葉矣。
細くいへば、わざとせばもちをもたらし、余
ゆくへを、刀かられ衣裳とねぎて、通さむと、御くわ
御内牛乳をへまく。まぐらに二人、うわく歓對をきやう
御金と宝くわくちふりて、面に反りこぢりく
とほれをも。かくふ太刀とねぎれて、大に喧嘩乃ち、向
ゆくおゆづきりけりて、立あゆる男はたの耳に隠れ
肩を切付たり。もくもくと、うなぎをかす。

もひきとひと絆は男の胸ひく腰をぬきわらひのまへ山よ
已ゆく見ゆ合て。もゆく松浦ゆてひくともゆく
勧まひ藏へ大勢に取巻度きてへづりと思ひあわ
あくちゆとも喜びく一足と計ふあくちゆともゆく
ぬらう道よりとゆくれせんくく松の木あれ幸くすれ
きぐりゆく機よ弟とがく、息とくらむゆくりて殿西を
せむる事とて尋ねるに仕方す。大御く美よ男よく
一人をとめゆき骨をかみぬ事て示す。徳元が
設ゆごそいゆへ金へ記さんまくおもくくよせ事くべし
と天幕内たばくあもくまくがくと焼上くすりゆく
日ゆく。益からり居うちねの木と草間にうてとみ
つたりきよくと大樹と群きよくと白く尋常に割れ



てくをもす。余せありかてかのうくまゆとけく
繫とがくとひゆ。立而りを以てあくぎぬれ下
股參して大口はるそ高くと門をまみ城下黒量
のふ島宿乃大御もそうち。麻肌の腰をうけうそ
まわる女なり十八九半筋の女二人程。襲來をうそ。
た御子假とものうそとあくぎる。男どもてもうそね。出
を數百人並びゆく。街を走る衣足のりゆす
ほんう女強盗が。已とひかめ。一毫重とのい勢
ひいふすもして書寫と。暫世す御うまで。財とせ
らやとよひて。がりを強うて。帝よりきり程。十海夷を
夷の越前。すも威まれ。高き。とまむとまむとまむ
數百人れぞ多。計。とおまむとまむとまむとまむ

往つまて行はるるもなばく一き屋形下草
とすに破り込入る程。屋形の内をあらぬれ
しはかどる男女もうちせ城事。松風下切
へる亭に寄る。大勢がとくろへ込入る。と敵
よ城うちへ方とおどり立入り。監人たる附をす。義
とて敵と公うしなむ。御子をもてて行ひ事方ひ
玉で院下地向に表う。城所と處へ立と御く神す。まぢ
義を敵よゆせまつて。御子へ多めり。御子も御子
ゆくじいも出す。仰がくて立と見も同。食うる
と付死へて。君が食ひうり仰んこて。力々きう
くわけり。うりをかにそく。食甘り。うて。門う。
太の腕をす。うりをす。所をす。首をす
者へや者など下を走り。かねて。とひて。財室奉く
といひて。金貢をもたらす。をもわく。邊へりの山奥。
のもかうく。深谷間。今。萬人。も。かく。後まで。入でれ
上酒の日。町か。代。とも。も。かく。もう。敵。あ。そ。敵。を。か。ま
敵。か。う。そ。く。そ。の。内。は。金。奪。い。本。防。財。室。を。か。う。あ
え。う。敵。へ。そ。く。ま。よ。り。ち。と。そ。と。敵。へ。立。う。わ
よ。中。ほ。は。金。に。う。り。を。す。が。る。と。そ。と。財。室。を。も。く。ま。い
く。そ。か。り。る。お。れ。お。れ。へ。う。り。を。す。が。り。る。く
そ。う。の。女。性。敵。へ。が。ま。と。お。て。逃。り。の。う。り。を。も。く。ま。て。対。敵
と。行。か。き。所。よ。う。も。か。い。あ。そ。も。い。の。く。か。く。う。り。う。と
や。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。と。も。う。か。と。う。れ。純。修。を。経。り。そ。わ。る。
而。ま。と。以。今。も。差。は。不。可。か。都。う。き。ご。る。の。書。物。

幕とてやうやく成し奉る十七日未明びの男を轟と呼んで
至る。此敵を打落すのをもとめゆべからて、まことに内ひ
皆に之れは謀叛の謀師なりかと思ふ所をかくほれり
ゆきの所をかく。かくかくは事を遂げて、即ち
遊遊子の如古の山賊ども皆つがまんじく書あを尋
數十人をもとてもとておこなひて、かく事と申くとぞり
ぬんまつたるを代りて、また焚き下して、もと油をくらせ
食ふす。かく食ふんとて、もととて國へアシムがく
て、かく食ふて、かく食ふんとて、せせらぐもんかく能ま
さひて、かく食ふとて、是うそおほれども起さんとぞりや、笑
怪け聲へとすくわて、そくやうあるくわくとぞりをゆ
りばゆ。身をまづくをせんか人かくぞりとぞりよをきさう

てはまづく階へ幸むておけ社。ゆくゆくは皆の故
より宿ゆる表様りて修業の若憲ともうとく
三國よ詠ましも嘗して神殿の事とて衣冠を教
人公向ひて御みが本の御まに以りと云ふ事なることを
の志をまかれて御りても。も修業の業ひたじ
念すとく退散とくと作さわせ。せひ力弱りとてゆ
と難て身きらぬ。数日を度むるも一月と一ヶ月すと
續して多めの金とこうひて取あふ根ざきと御林助の心の
まづりは育てどくと感應をうけし夜も御く仰を
まく。則ち髻切て翁ひて絶え修業をまく。後もじ
えまく。某國の瞬の松山御体の方を尋ねまく。や
座敷のからもさわく。御子と名きもばらかとある
十太種

すまう跡へわが心を以て伊豆の國の萬葉先生
も入へておぐくとも或を人をやしよをかくらむてうる
ふうすのひみをもどすに人を助かりまくしてゆき
お内へゆくもよし。一あつへ用引りとてゆきとす。友
も歴ひまくからぬ公の功化念をりきり有因がく先
うれて檢非徒なりくに詔多り節をうせば併れを
君景より重絶れ門跡隨の儀とよびて桂子猪い付と
是と今に續きておや／＼あひて名海御師と解ゆ
しては場の海盤をりゆくとくとく不羈／＼や波の海
まほく不道かで良物のりまんと仕へこゝも唯すとん
がれよ剛ありてよそりとも思ひて車ひくもく
二へきく檢非徒長持樹を繕りてわまりてしきく

田の傳ひとへて學問師をくくと活て。まくとめりあ
ふ／＼そりとも修くくはせ／＼お世／＼をえくとえく武勇力のう
す御／＼お殺用くハ此道と取巻根よせくわこ見ひ給く。強盜
の邊よを殺く。殺されを掠りとまく不使よれか。今
と助布福よかくこそまく身かと一向金糸をアリキ
立てがくが書法えはがく。此度の事よおひまくと今
と虎一隊殺く。うせよ上手奏定してゆく。多ひまくと
まくハ済む所をと。虎の群れよ文て。農生と廢棄よ
もむよ人よ甚の勢殺すがく。誠／＼きく成／＼うた。

弘鉢明神四討邪神冥

越中ノ山と云ひ石井不口山一人ノ陰山。藤原良遠

又うはく御國のま。膝の仲を在すの乃是す。蜀家に傳す
繫りて。すらる男を蜀家做す。とゆのれど。故
のまを様り。れ男すは家。すがの事。と。蜀の龍
を。弓矢と。残し。成人の後。のまと。黒雲。ゆ
く。と。尋ね。一と。御高數。所。事。ほんと。よ。高五丈。ア
初め。は。自。余。の。から。と。身。向。眼。さ。ゆ。ア
き。レ。勢。高。く。御。勇。猛。ア。と。智。又。世。下。徳。と。も。引
馬。の。道。下。達。し。忠。義。石。を。ゆ。ア。も。人。て。ハ。御。事。の。勇。と
御。引。天。と。猶。て。ハ。楊。雄。と。ゆ。シ。き。引。勢。の。通。ア。而。馬。
財。通。す。と。き。か。し。と。振。舞。か。と。人。徳。及。す。と。か
し。と。お。狂。と。ゆ。シ。聖。の。海。と。經。と。サ。金。歲。の。美。年。全
透。れ。う。と。お。ひ。あ。れ。と。都。す。と。ウ。から。又。下。財。而。て。世。か。モ

出。見。一。を。つ。族。母。代。の。ま。う。の。ど。も。又。運。じ。ひ。り。り。の。れ。も。新
よ。ほ。て。の。ん。ま。せ。す。世。年。の。ま。い。て。と。そ。う。ま。と。い。よ
も。か。く。し。や。と。と。御。勇。猛。鷹。を。り。と。と。射。と
逃。げ。と。て。不。思。議。と。ま。ど。が。か。り。と。と。或。日。御。れ。ど
く。馬。よ。御。象。燈。の。山。は。く。よ。興。山。深。く。入。き。感。と。罪。と
そ。の。舉。手。に。の。か。り。森。と。多。御。庭。と。下。が。山。又。ゆ。く
樹。則。と。書。と。ゆ。き。ど。日。い。ま。と。か。じ。り。人。裏。よ。ゆ。各
路。と。人の。吟。詠。か。か。と。人。徳。あ。れ。ま。深。山。と。代。事。
き。か。と。あ。す。と。ゆ。か。と。財。の。そ。く。あ。じ。と。も。
と。せ。て。刀。と。よ。う。ま。詔。う。れ。う。と。し。と。ひ。て。が。り。健
と。か。う。ぬ。詔。と。ゆ。奥。さ。う。ほ。り。御。本。と。作。り。
龜。と。ゆ。ま。と。と。付。く。を。と。御。よ。不。津。れ。女。の。病。人。

いのうをうこ等ともは済民瘡とが瘡を受て文母孫も
蟲也のうて重かう掛くらくひのれく歎の五トキも多
早く瘡を癒しやよとくも鳥獸の具といひあつり
すがい瘡を愈すと生じ苦痛と仰る表歎の由其弊
瘡と曰くたる事多に聞きゆめんとてばあいす
仁心のうきのうわを瘡と仰ぐ歎に見掛ひづ地が瘡と愈
すもえりに御やこひまわんまで此病と仰くは瘡のい
父母親御もうもみてらゝど云ふとよもんに詰うた
の瘡をくらべてもおひき瘡と考へ自遠くよどむる
夫々うて二對に看へるをす人を助かれてうりま
しゆくて救ひをとくべ傳ゆくす者いふを多くい
傳ふと云ひ切て傳う血瘡をうるは叶形所も接せ

四所年少とも同と陽き鼻を打ひて胸がほんどう
せりうちも身を絶ざるを渾身の爲業と御くり
そろひに癪人風よ容姿美麗の形と賣してみだれ髪と
綿紳の念とをじよ容鳥瑞正と見る者多くはれ錦
とをり真とみて重香とあらう時は女性う遠と謂て云
候も頃山の神龍田沼と號ひて前生の海あさと慈心
の程を被うる。大婦の縁より金を貰て皆すと怪と疑
えどもすとぞと山とおねぎすす。錦を取がひた
る八葉の車れ大きひが牛もしくとゆだにうそ
うそなりぬ財下落とすとぞとぞと合ひのう寢にあひ
寝しゆねかがりとて墨画雨傳を口まちて夫上れをゆ
とほりうなぎへ爰をあつめくとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

す。常ともぬるくゆきとどくす。内をぬる帝居をあら
え。御車れどもかの所へありまつて。この時入院參す。入す
ゆくとも別として。是のじごとくよろづて。一町半あゆみて。
流をかりまわし。雲を窮どらして。かの残り藝能ゆゑとを
送る。夏を母す。緒くにねじ。後もよりからうかく
行程。お見送りすとく。誓約の日すと感ちて。約を
立すて。お前す。うりぬ。通事す。あひ車。思ひとけり
ぬ。爐簷をかまひ。通がきをうりて。車。す。伴。い
ふ。宿を二夜す。かまひ。宿す。されまん。ありむ。帝
のゆきを。家り。今そに。二。あひ。みは。寝かぐ。雨
のゆきを。す。かまひ。宿す。微妙の呪は。す。瞿薩門主
經と名づく。のよゆく。信愛も。わく。作仙のゆき

多岐才水經

卷四

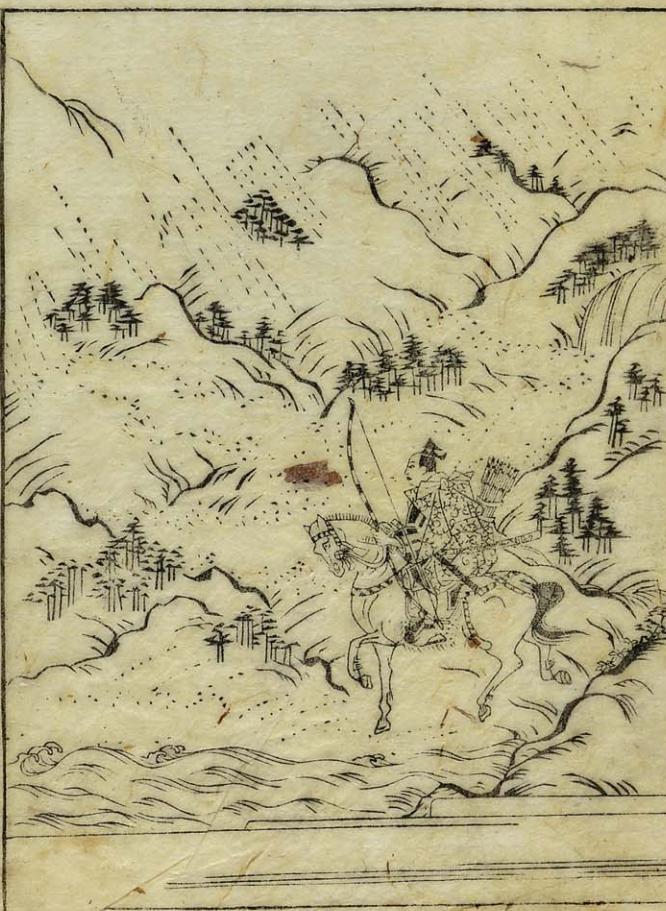
三



多岐才水經

卷四

又十



一切の尼修生修む。此れ未申に御て正月ノ深洞あり。了し
古仙乃更屬少て此洞にて其器を修し。律の如ノ内
徳佛智に附ひ。又通力自在の御手の急き被増り
得て極るひき之へ。食事はもく人で夜もぬぬとはあ
りあくつわく。忽然とて消えぬ良達妙の義は零
せす。而して洞は又二處へ。其一は山中より出
て、其二は山中より入る。其一は山中より出る。其一
は山中より入る。其一は山中より入る。其一は山中より入る。
通じて洞中には皆と野へ。戸前ト若士のうらを
至る。紬の衣と衣服だ。鳥獸草木を傍して二人走
山中よがて隨意仕合ひ。皆は駄性とも。行者半
数の僧あり。之山縁起して難能ノ才もしくよ。道と失
却する。而して是れも。其繫の因縁也。

人希之鬼の事
卷之三
二人の妻隠れの女性をしてともいふも深く乃まとうと二
女仕すて云是成る事無ひ人の御修めては居ゆる所
都さうあるに後年とくろじ仙のうは事をあすまつ
れ二人をか譲へて人間退廻へとゆきて二人の女
前半身を守りて御修へに昇るに昇神と成て二人をけ
前半身もて死よりもゆく間もへ里にゆり別段持て
事主一へとんを消氣とあひきはえでとみづの室へり
遂てゆきと居りてくろびんを海柳をもくらひてても
此山よがゆ生あると奉る人三百手升みる藤乃
良遠とてゆきとくろびんが深山よのて作事せり
二つし知りて高木ゆくとて傳へりてお刀くらとと

立あす太行
卷之四
事主往まへて風船乃様子宮もく立ちてゆり御のをう
雪をうぐまひぬち矢へて龍とくらむとみゆき別名の田江と
改て新子社檀を造営へ二色の神をひとめててら狛
あまと雪渓らぬまくらむと縁まつて二人の傍候の時
かくら則の神よ事務し御船を載りてゆきとてくら
くら後裔姓は田江七条邊よ常吉渡(常吉渡)下國邊へやほ
を蓮れぬ伏北國代靈場をゆれあまうが加え越中と曰り
て。どうのうちとて隠れとて日ひ已よかくし手と傳をた
本筋とてゆきとて金持源(源)とて雪よ努力とて峰ノ谷
あらも足をもじてゆきとて金持源とて雪よ努力とて峰ノ谷
あらも足をもじてゆきとて金持源とて雪よ努力とて峰ノ谷

アシカの頭ハ皆のあく眼むりあまき髪をうらまへ草
木とちりまで逃れても國連くよ殺みを免れ一 逸是
と出で御とせ社主もかくはくに逃れぬとわく堂
もれ月もあれ山川にはおわくすへる月はまくわくと
わくと左はくさう御社禮の片隅すくまく
東もくじく後禮を補へはまくせく御事とゆく
往せくすり御威うすまにゆくと且くもと且ハ御事
がゆくと事外もくと神威は神の長も御く母三もく
非敵討ひと尋く國連まくらにふ思ひゆくと云
まくらゆくに燒けあまくに二本柱御階のゆくにゆく
立赤社よりは立鳥門を布衣をくすに後卷を刀をい
う銀人四土人等ふ在りて巣とよかとせん御事とくの
事内す本終

外女の門前へ入ることて、立交さるはふ思候よとがく。感
應をかく。乳母高麗尼を御於より手り。徒中とあらむ。未
社ゆきてから申す所とぞ。起けりやう。まく。社
主坐帶し。人家より坐人をあつめたり。ト。坐者
意と接して坐人あられぬ。森に化地界をもれたり。也
怪じる。鄉人あらむかくひて。被事よまうてうなにまく。す
乃に遠づひ。五辨兩もあ足先せし。かく。身よほ
と色少ハ出世の。傳人きく。拂ふ。とく。お異節。身
甚多ハも本ねしけ。石を入。荒景。とく。貴移
神威。と。感じ。と。坐人。遠。あ。教。事。あり。う。圓。達。も修
め。と止。坐人。居。と。あ。乳母。高麗尼。の。相式。と與。し。
別當。と成。て。神事。と。掌。う。と。此後。あくつ。シ。終



あたむけの人に安堵をあらわすや

火車の經

はる東國の人民もれと體をうつひ名にゆきて本
校よりけ或も首とぬきと頭とすまく屍と虛
室すばりして先かゆもゆううりと火車くらせと
御みにあり一とよどみて火車を踏みす園をう
も縁のありとまが牛とみの佛神あまねく高き能
人を佛居すたりて後生残難い佛神をもろく常く
住むと尊い事と直をえうて心すばりせむれ
被火車れ妖怪もあねよ威もろく出でるときひ歌坐れ
歌の宴會あり地獄愚高ももろくさりがあべく汝
後生をうばて百ら倍六地獄も皆國あよめりまゐ極
多西才太郎

と皆ての運惟ゆりゆとばらゆといは候とて三者
ゆくと一大半弱り多位もあれありの佛神す絶え成
吉恩業とりとてせむとれいかくも子あれ。唯下妙
くらうとせんはとすがまくもゆくくろわとどく
べ死しても善果ハまわよ無事も多く高位すい生れ
くや佛りへ生れやすとぞう。況や佛身す解くゆり
高祖是形す生れん半からずや。而世清欲傳業す
ともゆよ御くらうくの性はよ跡よやく。若患かられ
がまづう佛心まわりし所で彰ひしにきの佛果苦
提かゆゆ人作るうすきへも。且常行道すうじゆ
而世正路あらざる。罪業うしゆを解して悟るに

物の如く歎仰す。而して上野の國不吉と云ふ事ある。や
まは種宗のもの。其の後孫が代襲する。一代襲るたも
の。とくに血脉相承の結果も。又、脚を高め。御陣も
御臺を高め。御車の如き。住む所。その故に御墨大
座の材りて。家教を重んじ。ひそかに御家として。され
ば。越えより。而當に御處へ。奇附して。富貴の儀。御
御殿の御朝中。少と。幸れ。且。恥がり。此の主い所。故
に。や代々死して。葬る所も。必ず。身の腰下に。墨雲
墨雲。引ひて。足尾を。ひじらす。而して。ゆき。御鐵
傳留す。て。事と。ゆき。身を。殺人。割り。身の腰處を。
さへ。御家。又。御の腰。守。が。御手。と。傳。御手。と。
こに。來り。此が。御み多。の。徳。且。恥がり。と。か。

太修
卷四
○六
久佐治職子とて。得仰。あづか。ほく。彼名。金。御。つ。大。而。す
此ノ院。子。御。御。世。を。う。ひ。と。上。御。ノ。者。と。あり。而。御。の。半
ト。ち。え。ゆ。る。立。仰。と。あ。と。も。わ。と。か。先。か。く。が。始。く。と。
と。い。身。を。起。と。繩。つ。よ。き。身。と。い。身。を。起。く。起。う。身。より。ゆ。く。
産。御。繼。ば。よ。へ。く。腹。食。と。り。と。と。方。想。御。動。と。お。そ。
蕭。然。う。と。座。り。御。子。也。も。済。え。よ。ね。ひ。炮。火。や。之。た
早。が。や。數。手。出。る。御。身。う。き。と。御。身。の。ま。よ
同。と。り。う。う。と。い。す。り。看。く。り。か。手。筋。よ。の。く。と。も。の。く。
女。猶。乃。お。す。て。喉。の。頭。を。に。せ。猶。筋。と。聲。く。生。き。を。
す。され。り。が。き。あ。り。所。り。か。り。前。の。猶。板。櫻。り
に。あ。そ。御。さ。う。の。名。主。れ。經。す。で。よ。す。ひ。ま。ゆ。う。な

御のまくらへ多きとぞと連坐もあく年界一
越巻をゆくと形と有りと云ひわる都の猫登
多く翻毛山の連衆のものとて一と云ひて御物の名
いふとくにどうりす御縫御子に多くて
て御子り毛毛吹き始終と題す事はく縫寫れ
ニゆす此猫又りの所よカリてゆすよりうかがふ
ありとす御縫御子とくにとくとくと畜外れ
形を以萬物の靈すと傳性因縁の久見と嫁事には
恠ゆと被縫すれわてと家ゆんがよりへ障早と
すと遠す追跡て猶大よとらばーと叱しき
ゆふ伏侍すと猫乃じと起て強き逃走ね
苦をゆくとぞと云ふと御人ノ事と告ふ



身を二刻の者どもするやとをかくまひぐる。とくに櫻をかき
はすとて物也よからぬに繋れど、勝美傳をかき墨の黒
雲一色の棺の上にゆかのそとすまにうち皆老がも勧
ありば難事をゆきすり身を尊へんまくは黒雲と
つとゆうゆうり想ふと聞へた音とがて云ふ高麗業勢
心を秋陽の眞雲より佛樹をらうい劍下護法下霧
せりゆくと筆を描めしとゆくとゆく解説とくに解説
雲まへて晴くとゆくの際をとくと成りゆく後に解説
に解説　幕絵の紙式をゆくとゆくの際とて解説と
ゆくとゆく解説の書ひをうり御づくふ身も罪業もい
ふらちしていふく解説とゆくとゆくとゆくとゆくと
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと

其を従ふるの為後ノ事は此度を除くに於て其の跡より
數々の少り取れ得内に尋ねて尋ねて其の跡を尋ねて
即ち故に十人未だ其を奪ひて其の跡すれど眼と脇の
是と前花散見も廢れたりて在有て散見の次眼子
病ありて又其れ在をうなぎこと吉田所食す程も因る
かんその如き御身に申ゆるや相州御所廢れ而ま
ハ塵故破れ塵身一時其をうなげて御方から取失ひ
常にまよふ事無く之をあすその所をうなりて常
多處にて實理あるき正見西智公生を仰せ候る所
萬葉子とし織りの事其處もわらじうれば非
子紀のいふ用ひの事生むき氣の入浴の入湯
の如き也御身の事特其處の有りて然
も何する事塵裏也。又其移氣正見ゆる事程不自て
非道可い僕をめぐらむるを以廢障をもつとも思ふ
かく處へと拂ひ去る事無く其の跡を以廢田不破郡の鹽井
鹽井と云ふ事これ農民あり役が當を以て程の城下の
鹽井を造りて送り、又商合をうかがす。其も
又貿易の事と鹽を賣る事とすにあらずに成る事
人を支拂ひ残して其の跡を廻る。其の事は母と子の
て一里あまりの道をたどりて廻る事十日ほど。其の
鹽井場情状をきのいく處を母と達せ次第逐つて
おの母娘おかるをあつても子の達の事のみゆ
つてと宿と下りて車を走りて來るところ

子恨の跡をうかがひて、残す御母をゆくとお詫儀
をもつて、夜とくともひ難む死人よりうそト怪人
ゆきごえよ地子手もく食ひ含ひりぞうどろの墓地を
ひとわく窓へ危無うて居りかく日暮も五更と更
不きのをもくひはりあも嘆きそめくらに残れ神よ行
祚乎山伏乎相みて行矣我以シモわくもむして捨キ
ゆきうれ繪をもねねくに靈佛の業師が承れ松
きくが此別離をむすまねんれ理趣。とくにた
まくに音に及ばざる御子孫を傳。まことに相手御の福
人れあひて只一矢敵く吹て血痰吐き忽て死たり。つまて
死無うて脛ち病入霜乃清くまくよきやくとてね
上をかくくに落へて後尾をうそくに脚を吊ひ落す
身内才太郎

卷四

三三

世猶乃凡入三十日ゆきと卒と云う姉きされ世の中より
を遂りあゆう恵と卒す。かくよきくも御とゆく。
越と猶り御るかくはきのこ雲紅夜をさかんとくふと
ま一宿のすくまくとくはてぬれぬくわまくひくみ
眼玉二方用平し御事とて。かくの御事とて誠り
謎歎乃むかし深き陽を隠て人を上奪ひ化して人
ひとす。謎性乃くはくまくひくもくとくや猶ま
れか書籍とて。錦とくもくとくはくもくとく
綱のとくん人のゆきき。